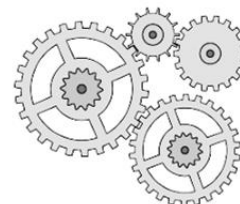


『教育調査』1958年2月（全国教育調査研究協会編/帝国地方行政学会）

勤労青少年教育の問題点を 明らかにするために



矢 口 新

1

勤労青少年の教育問題は、実は日本の教育全体の問題である。もっとはっきりいえば、日本のここ1世紀間の教育体制の伝統や、その根底に生きている教育理念・教育観を根本的に検討して、その転換と改造をはかる機縁となる問題であり、またその結果としてはじめて解決されるような問題でもある。こういういい方はおおげさであると思われるかもしれないが、実は少しもおおげさではないのである。

勤労青少年教育ということばとともに人々が思い起す中身は、中学校を卒業して高等学校へ進まない人々の教育の問題だということである。それにはちがいないが、こういうふう to 考えるとき、人々の頭の中には一定の考え方がひそんでいる。たとえば中学校を卒業して、高等学校へ行くことができない恵まれない青少年の教育を考えてやらなくてはならないなどという時の考え方である。この青少年を恵まれないなどというふう to 考えることには問題がある。確かに恵まれない青少年であるにはちがいないが、それならこれらの青少年を恵まれるようにするにはどうするのか。そのとき人々は、ほんとうなら高等学校へ行くのがいちばんいいのだがと考えるのである。しかしそれはいろいろ条件もあつて問題がむずかしいから、せめて少しでもなんとかしてやれないか、せめて青年学級へでも、通信教育へでもと考えるのである。定時制の高等学校へ行けば、まあまあ満足すべき状態であると考ええる。

つまり最善の道は高等学校へ入れることだが、それができないから次善の策が考えられるのである。そして勤労青少年の教育という時は、いつもこの次善の策が考えられているのである。

ここには、勤労青少年の教育をどうするかという独自の考え方がない。教育の本筋をもっぱら学校へはいつて、いわば、学校へ行くことだけを目的としている人々の受ける教育の形をもとにして考えているのである。そこでそういう形で教育を受けることができないのは、不幸であると考えるのである。だから恵まれないというように考えるのである。これは一面にはそのとおりである。日本の現在の教育制度は、もっぱら学校へ通うという形でしか、つまり遊びながらでしか、教育は受けられないようにできている。そういう教育制度も、根本には、教育をそういうものとししか考えないという日本の考え方から生み出されているのである。日本人みずからが、そういう教育制度を作り出したから、そういう恵まれない人々が出てくることになったのである。だから確かに恵まれないといういい方は、現象的にはそのとおりである。

しかし、それは、日本の教育制度に問題があり、否、根本的に、教育観に問題があるという形で反省されないままに、ただ学校へはいれないのは恵まれないのだと考えているのでは、問題の本質をつかんでいないのである。ところでそれでは働く青少年に教育の機会を与えるという制度をつくらうという場合に、たとえば定時制の高等学校をふやすというような考え方をするのは、どういう考え方であるか。これもまた、もっぱら学校へ通う人々を本体として、勤労青少年の教育を考える型である。だいたい定時制などといういい方がそうであるが、基本的に、学校を遊びながら通う人のものと考えているのである。それを本体として、定時制は勤労青少年向きに多少形を変えたものなのである。しかしそれがほんとうに働く青少年のものでないことは、定時制の教育をみればわかるのである。働いている青少年とは、何の関係もないようなことを教えている。教師もほんとうの教育は全日制でなければできないがと、しぶしぶやっている。そこには情熱も何もないのが一般である。生徒もただ免状をもらえばよいと思って来ている。自分の日々の生活、火花を散らしている職場の生活の問題を、どう解決するかを、そこで聞こうとはしていない。こうして定時制は、そこで人間がつくられていく、生きた教育の場所とはなっていないのである。つまり形だけの学校なのであって、勤労青少年を教育する場所ではないということである。

これは、働く青少年の教育を考えると、働く青少年には、何が必要で、いかにして教育するのがよいか、というように考えないところから来るのである。そうしてただ単純に学校をあてはめるからである。

勤労青少年の教育をいっしょうけんめい考えている人でも、こういう落とし穴に落ち込んでいる人は多いのである。否たいていの人がこういう善意のあやまちを犯しているといつてよいかもしれない。ここには日本人の教育観の根本的性格の問題があるといつてよいであろう。

2

日本では「学校を出て社会へ」ということばが教育のあり方をもなしている。つまり社会へ出る前に教育を受けて、社会へ出たら教育は受けないというように考えている。社会へ出てから教育を受けるなどというのはよほど恵まれない人だと考え、それは変則だと考える。教育の真の意味からすれば、そういう考え方こそ変則なのだが、気がつかない。ほんとうは社会へ出てから生活そのものの中で教育されていることは、とうてい学校の比ではない。もしそれに、1週1時間でもその生活に即して何か計画的に、自分の生活を反省したり、検討したりすること、つまり真の意味の教育が付け加えられたら、たいへんな効果をあげるのである。またそういう教育でなければ意味がない。生活教育とはほんとうはそういうことをいうのである。

しかし日本では、そうは考えていない。社会へ出る前の教育が唯一の教育であって、社会へ出たら、もう勉強させようとする人もいないし、する人もいない。勉強するのはごく特別な人である。そして、社会へ出る前の学校に力がいいる。そうして、それに対して迷信的とでも言いたいほど確信(?)をもっている。そしてできるだけ長い間教育を受けるのがよいというように考え、ねこもしゃくしも大学へはいるのである。それは中学校、高等学校の教育をすっかり入学試験準備の学校にして、人間を育てることを忘れさせているが、そんなことはおかまいなしである。念の入った人は、中学校、高等学校の上に、さらに2年も、3年も予備校で試験準備をして、これ

を通算すると8年も9年も、試験準備をしていることになる。しかもそれが将来の生活といかに縁の遠いものであるかはみんなが知っているから妙である。それでもとにかく学校を出なければということで、もう手を拱いているのである。

これをやめるには、根本的に教育観を切り替えるしかないのであるが、そこまで考えられないから、ぼう然自失といったところである。もし中学校を出て働きながら教育を受けるという青少年の教育を、教育の本体として、そちらへうんと力を注ぎ、金をかけるということをしてみたらどうか。こういうことを言っても、土台の考え方が違っているからなかなか受け取りにくいかもしれないが、たとえば、大工場のもっている技能者養成所というのがある。これは、そこらの公立の工業高校などが、足もとへもよれないようなりっぱなものもある。ここは3年の期間で、働きながらといっても、ほとんどすべての生活が教育という形で行われている。ここへは現在は、高等学校へ行けなかった者がはいつてきている。それは必ずしも能力が低いためばかりでなく、経済的な事情とか何かではいれなかった者もいる。特にすぐれた大工場の技能者養成所へは、全国から選ばれた者がはいつている。だから、環境もよし能力もある。そこで、こういうよい技能者養成所はたいへん能率をあげている。ところがこの教育機関は現在、ここを出ても大学へはいれないのである。そこで袋小路の教育機関となっているわけである。

これがもし、こういう所で教育を受けた者が自由に大学へはいつて、自分の専門とすることについて、さらに研究をすることができるようになったらどうであろうか。さらに一步進んで、こういう形を教育の本体として考えたらどうであろうか。入学試験の準備をする学校へ金をかけるより、ほんとうの教育に金をかけることになるのである。これは、根本の考え方の問題である。

もちろんこのためには、大工場や会社が、自分の職場の青少年を育てるという考え方をもたなければならない。金も出さなければならないが、それは、国家全体としてみれば、今でも金を使っているのだから、切替えの問題だともいえるのである。

これは一つの例であるが、こういうふうを考えることは、働く青少年の教育を主体にしてものを考えることである。そうなると、働く青少年の生活はどういう生活か、どういう仕事をしているか、と考えると、そこから何を教育し、いかなる方法で教育するかが根本的に考え直されなければならない。昔からの惰性になっている高等学校の教育のまねごとではすまされなくなるのである。そこに生活からの教育もはじめて考えられるし、真の科学技術の教育も考えられるし、いわゆる産業教育もそこになりたつのである。

こういう学校が本体だというように切りかわったら、かりに今の学校があったとしても、だれも働きながら大学へ行けるほうへ行きたがって、まず就職することに夢中になるであろう。今は働きながら学校へ行けば、よく勉強できなくて、上級学校へはいれないということが、動かすべからざることになっているが、それは、成績がよいとか悪いとかいうのも、遊びながら学校へ行く者を規準にしてものを考えているからであり、あまり知らなくてもよいことを夢中になって覚えなければ、よい成績はとれないというやり方を地盤として成績を考えているからである。入学試験に受かるというのもまたそうである。そして遊びながら学校へ行くということが本体になっているから、実際に能力のある者が学校へ行くのである。反対に働きながら学ぶことが本体になって、そちらへ能力のある者が行けば、逆の結果になるのである。こう考えると、けっきょくは、

切替えをすればよいということになるのである。勤労青少年の教育の問題はかくして、根本的に頭の切替えの問題であり、そして教育体制の切替えの問題である。

3

勤労青少年教育ということがやかましく言われ出してからかなり久しい。しかし事態はほとんど進展していないのである。同じ所を、ぐるぐる回っているという形である。それは根本的にごまかしがあるからである。意識的にごまかそうとしている悪い者がいるということでない。みんなが、ほんとうの意味を自覚し得ないでいるということである。知らず知らずに、ごまかされているということである。その根本は、上級学校へ進学できない恵まれない青少年を救ってやろうという、この恵まれないということばの中に含まれているものに気がつかないからである。

そういう崇高な精神で、勤労青少年の教育をほんとうのものにすることができると考えているわれわれ自体が、少しおかしいのである。いくらそう考えても、けっきょくほんとうの教育は、働いている者にはできないのだという観念が、人々の心底に動いているのではないか。そうだとしたらおかしいのである。あるいはそれほどでないにしても、けっきょくは不利だ、働く者は遊びながら学校へ行く者と比べて、どうしても条件がわるいと考えているかもしれない。実はこれもけっきょくは、ほんとうの教育は、遊びながら受けるものだという考え方なのである。

そして、社会の指導的地位に立つ人が、けっきょくはそう考えているとしたら、どうして勤労青少年の教育に身がはいろう。たとえば、その人々が自分のこどもをどうするかと考えてみたらよい。いくら勤労青少年の教育だと叫ぶ人でも、自分のこどもをその学校へ入れようとはしないであろう。社会のほとんどすべての人々がそう考えているのだから勤労青少年教育機関などというものは、浮ばれるはずがないのである。

試みに、勤労青少年教育機関の花形である青年学級を見てみるがよい。施設なく、教師なく、教育機関としての態をなさない。1万からある青年学級に、7千万円ほどの補助金で何ができようか。それでもいっしょうけんめいなのであるが、根本的に、構想が違っているというべきではないか。

たとえば青年学級には指導者がいないといわれる。実際に指導をしている人々には、小、中学校の先生が多い。これらの先生が、まるでばかにしたような講師謝金で、いっしょうけんめい指導をしている。なにも金を出すから働くというのではない。しかし、そもそも根本的に、社会の常識から離れているのである。つまり、けっきょくは、小、中学校の先生の自己犠牲のようなものによって、なりたっているのが青年学級なのである。そういうあり方をさせておいてよいのであろうか。そこには、根本的に考え直さねばならぬものがないだろうか。これは政府や市町村が金を出さないからいけないのだというようなことを問題にしているのではない。政府が悪いのでもなければ、文部省が悪いのでもないであろう。それをささえているわれわれの教育観の問題であろう。

青年学級は、社会教育機関であって、学校教育機関ではないといわれる。しかし、恵まれない青少年を救うという考え方なら、徹底して、学校にすべきである。そして全青年を高等学校に入れるべきである。そう考えるほうが筋が通っている。しかしおそらく、だれもそんなことを考え

る人は現在のところあるまい。そこには、お茶を濁すという考え方があるかのようである。否、そこまでいじわるく考えてはいけないかもしれないが、何か割り切れないものがあるだろう。これは、青年学級へ通う青少年自体についても言えることである。青少年自体も、ほんとうのところは、高等学校へはいりたかったのである。そこにあきらめのものがある。劣等観もあるのである。劣等なのだからしかたがないのだと、われも人もともに考えているかもしれない。しかしこれはくせものである。働くことはなにも劣等ではない。また学校へはいらないことも劣等ではない。教育を受けて伸びていこうという意識がないことが劣等なのである。そうして、そういう意識をもたせた社会の考え方、働きながら教育を受けることはたいして意味がないという考え方、教育は遊びながら受けて、それがその後の一生について回るという人間の評論のしかた、それこそが劣等ではないか。そういう考え方できつくりあげられた現在の教育体制こそ、人間を生き生きと勉強させないという意味で劣等であるといわなければならない。

4

現在の青少年教育問題には以上のような根本問題があるのではないか。これは初めに言ったように、日本の教育制度全般に関する問題であり、その根底の教育観の問題である。その弱さがこの勤労青少年教育という問題において最も端的に現われているのである。

しかしこの問題は、一朝にして打開できないであろう。まず第一に、人々の教育についての考え方が変わっていかなければならない。日本人の教育についての考え方の特色は、あらゆる階層、あらゆる職業、あらゆる専門家の中において、ただ一つ、教育は教育を受けることによって、おのれの社会的地位を確保するという、家族的、個人的考え方しかないことである。試みに産業界の人々に聞いてみてもよい。その産業を進展させるにたいせつな人間の教育をどう考えているかと問うても、答は出ないのである。教育は学校で受けてくれればよい。産業界はそれを受け入れることしか考えていない。産業界がみずから指導的地位に立つ人をどう養成するか、あるいは一般の産業人をどう養成するかについて、教育的な考え方をもってはいないのである。それは学校のことだと考えている。その地盤の上で無責任なことを言うけれども、真剣なことは言わないのである。けっきよく、そこには、教育についての一般のおかあさんが持つ程度の考え方、すなわちむすこをよい学校へあげて、よい地位を得させたいという家族的、個人的教育観しかないのである。

学校の教師にしても、実は、けっきよくは、父親、母親の上級学校入学の希望に振り回されているのである。中学校以上の学校が、すべて上級進学準備学校へと移行しつつある事情は、その現れである。

国家が教育について何かもっているか、そこにも圧倒的に強いのは、一般の両親を満足させるということである。すなわちむすこを大学へ入学させてよい地位を得させたいという家族的、個人的教育観を満足させることを、根本の方針として教育政策を行っている。こういう状態であるから、年々上級学校の入学試験はきびしくなる一方で、ますます試験準備は猛烈になるであろう。教育といえばそのこと以外に考えられないのである。

こういう一般的ふんい気を打破することは、至難のことといわなければならない。勤労青少年

教育を進展させるには、まず、こういうふんい気と対決しなければならない。いかにして対決するか。その前に、こういう考え方の実態をもっと明らかにしていく必要がある。実はこういう考え方の対決の問題として、勤労青少年教育の問題を考える人々が少ないのである。そういうところからはほんとうのものは出てこないのである。ここには、われわれの研究調査すべき問題が多々あると思うのである。

根本の考え方が明確でないということは、これまで努力された勤労青少年教育の教育内容や方法についても、きわめて、甘い考え方しかしていないということである。

その端的な現れは、定時制高等学校の教育内容である。それは昼間働いている青少年の生活となんらの関係なしに行われている。教育している内容自体は、いくらでも生活と関連させて取扱えるのである。ところが全然そういう考え方がなく、場合によっては、青少年のほうが実際的に百も承知だということを、まったく知らない者に対すると同様な態度で教えている。あるいは青年学級においても、何を学習すべきかというときにすぐ頭に浮ぶのは、高等学校の程度を低くしたものとか、中学校の補習とか、そういうことしか考えられない。働く青少年の生活から、教育の内容を組みあげてくることが全然できないでいるのである。

これは、大工場が持つ技能者養成所のような所でも、そうである。そういう所こそ独自の産業生活の中から独自の内容を組みあげてしかるべきであるが、反対に、まったく形式的に高等学校の教科書を使っている。

これらは、やはり勤労青少年の教育を、真に主体的に考えるという立場に立っていないからである。また、今そういう立場に立ったからといって、すぐに、新しい教育内容、方法が生み出せるものではない。やはりそこには時間が必要なのである。徹底した考え方に立ち、新しい内容方法をつくりあげる考え方で、実践しつつ、一步步々深めていくことによって、しだいにほんとうのものが見えてくるのである。これらのことは、われわれに膨大な研究調査の課題を与えているのである。そういう研究や調査が、しだいに勤労青少年教育の具体的なあり方を解明してくるとき、その時において、人々の教育観もまた変ってくるであろう。その時にこそ、日本の教育構造も転換するであろう。これらはすべて、われわれの研究調査と実践との歩み方いかんにかかっているというべきであろう。

(国立教育研究所)